

---

# 少女の加護

坂田火魯志

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

少女の加護

### 【Nコード】

N0051B

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

連合軍の圧倒的な戦力の前に敗北を続けるエウロパ軍。その中でエウロパのエースエリザベートⅡデアⅡアルプ少佐は果敢に戦い続ける。彼女は乗艦である空母ジャンヌⅡダルクと共に艦隊の守り神とさえ言われるようになっていく。星河の覇皇外伝です。本編に出て来るアルプ少佐を主人公にしました。

## 第一章

### 少女の加護

連合とエウロパの戦いはエウロパにとっては辛いものであった。圧倒的な物量と技術を誇る連合の大軍を前に手も足も出ないような状況であった。

まず数が違う。連合軍は二一〇〇個艦隊をエウロパに送り込んできた。これだけの数を動員したのは人類史上かつてないことであった。参加兵力は六〇億、これもやはり前代未聞のことであった。これだけの数を送り込んできた連合軍はそれを万全の補給システムによって支えていた。寸分の間もない、そういった言葉がよく似合った。

連合軍の損害は常に微々たるものであった。とにかく艦艇の防御力とダメージコントロールが半端ではなかった。沈まず、そして立ち直りが早い。しかも艦内の医療設備もエウロパよりも充実し、医療技術も彼等より上であった。尚且つ後方には工作艦や病院船が多量に控えている。これ以上はない程の充実した設備であった。戦死者を出すことを極端に嫌う連合軍の周到な配備であった。

それだけに留まらないのがさらにエウロパ軍にとっては嫌なことであった。連合軍の通信も偵察もそういった技術もエウロパ軍より遙かに上をいつていた。エウロパ軍が連合軍に向かうよりも前に彼等を発見していることがざらであった。その為彼等に遅れをとってばかりであった。戦いはそうした圧倒的な差の為エウロパ軍の敗走続きであった。だがそれでも彼等は諦めずに戦っていたのである。

エウロパ軍第一七五艦隊。この艦隊もまた連日の敗戦によりその数を大きく減らしていた。

「二割か」

艦隊司令であるマロール・ド・クレール中将は今現在の艦隊全体の報告を聞き思わず暗澹たる思いにとらわれた。

「多いとは思っていたが」

「我が艦隊はまだましなほうです」

参謀の一人が沈痛な顔でそう述べる。

「二割で済んでいるのですから」

「二割でその程度だというのか」

「残念ながら」

その返事はクレールをさらに暗澹たる思いにさせた。

「中には消滅した艦隊もありますから」

「消滅……」

この言葉を聞き絶句せざるを得なかった。消滅とは戦争においては部隊の九割程がなくなったということである。こうなってはもう戦闘どころではない。三割で全滅とされているのだから。この二割にしる絶望的な割合なのである。

「はい、損害を受けたものや捕虜も入れまして」

「何ということだ」

「エウロパ軍全体でもかなりの割合が消耗しております」

「栄光あるエウロパ軍がな」

「残念なことですが」

「連合軍は実戦経験がなかったのではないのか？」

クレールは問う。それに関しても言わざるを得なかった。

「それがどうしてここまで」

「数と技術、そしてシステムでしょう」

「数は仕方がないか」

それだけはどうしようもなかった。元々数においてはお話にならない位の差があったのだから。

連合とエウロパは人口にして三十倍以上、また総生産においてもそれだけの差があった。元となる地力が桁外れであったのだ。それが技術にまで出ていた。それはまずはどうしようもなかったのだ。

だが連合軍はこれが実質的に初陣であった。設立されて間もない。また連合設立当初、まだ各国の軍に分かれていた頃から対外戦争も

内戦もなかった。あるのは海賊の掃討とテロ対策、そして災害救助だけである。実際に発砲したり危急に兵器を動かしたことはある。だがそれでも実際の戦争の経験はなかったのだ。

それはシステムによってカバーしていた。連合中央政府国防長官八条義統が命じて作り上げさせた補給、通信、偵察、戦術、救助、様々な事柄へのシステムが彼等を支えていたのだ。戦争を完全にシステム化し誰であろうが満足に戦い、生きることができるよう。八条が出させて纏め上げたシステムは連合軍を完璧なまでに動かしていたのだ。

人ではなくシステムで戦う、それが連合軍であった。彼等はそれにより元々数や技術で大きく劣るエウロパ軍をまるでローラーの様に押し潰していつていたのだ。それにより今エウロパ軍は大きな損害を受けていた。だがその損害の根拠は彼等のシステムや数、技術にだけあるではなかった。

「あの義勇軍がな」

クレールは呻く様に呟いた。

「連中がいるとな」

「手強いですね」

「奴等は捨石だ」

彼は吐き捨てるように言う。

「連合の人間ではない。サハラの人間だ」

「はい」

「だからだ。連合軍は奴等を最前線に出すのだ。正規軍の消耗を避ける為にな」

「ですね」

参謀達はグレールのその言葉に頷く。これはある意味において真実であった。連合は正規軍の前面に義勇軍を立てて攻め込むのが常だ。彼等はまず火事場に飛び込む。装備は正規軍のものよりもいいがそれは激戦地に飛び込むからだ。勝利の為だ。彼等の為ではない。実戦経験がなく、かつ消耗してはならない正規軍の為に彼等はい

義勇軍の存在があるからこそ正規軍の損害は軽微であり、エウロパ軍の損害は大きくなっているのだ。

「それに確かに強い」

グレールもそれを認める。

「奴等の強さは桁違いだ。戦争を知っている」

「はい」

戦乱に覆われたサハラである。当然ながらそこにいた義勇軍達は戦争を知っていた。

「そのうえ装備も。驚く程いい」

「強い筈です」

「奴等がいるのといないので連合軍は大きく違うな」

「少なくともここまで大胆に攻め込んで来なかったでしょう」

連合軍はどんどん攻め込んでできる。それによりエウロパ軍は雪崩を打つように敗走を続けているのだ。

「彼等が前面にいなければ」

「義勇軍は剣か」

「同時に楯かと」

「便利な楯だな」

そう皮肉りたかった。

「連合にとつては」

「ですがその彼等により」

「我等の損害はかなりのものになっている」

「このトリトン星系にも義勇軍が近付いて来ております」

参謀の一人がグレールに報告する。

「一個艦隊ですが」

「こちらは一応三個艦隊いるな、我々を含めて」

「はい」

報告した参謀はそれに頷くがその顔は決して明るくはない。三個艦隊もいるというのだ。

「既に二割を失った我々と損害が三割に達しようとしているもう一

個の艦隊」

「そして最後の一個艦隊は」

「まだ連絡が取れません」

別の参謀が報告した。

「本来ならばもうこのトリトンにおいて合流している筈なのですが」

「本来ならばな」

グレールは苦々しげにそう言った。

「だが戦争において予定や本来といったものは容易に変わる」

「はい」

「おそらく。敵に捕まったな」

「連絡は依然として」

「無事ならばいいがな」

グレールの声は苦々しげなままであった。

「それを祈るだけだ」

「若しくは別の星系に逃れているか」

エウロパ軍の敗走は何とか秩序だった。だがそれでもこうして行方不明になる艦隊も増えていたのだ。彼等は今絶望的な戦いを繰り返していた。それでも。彼等は戦わなくてはならなかったのだ。

## 第二章

「物資はどうなっているか」

グレールは今度は補給担当の参謀に尋ねた。

「思わしくありません」

問われたその参謀は首を横に振って言う。

「一回の戦闘ですね、今の状況で」

「そうか」

「このトリトン星系も放棄せざるを得ないと思いますが」

主席参謀が述べた。

「このままでは」

「総司令部からは何と言ってきている」

「軍団司令部は今戦闘中のようです」

通信参謀から報告が入った。

「ですから連絡は」

「ではここは危急の際の判断をとらせてもらおうか」

グレールは俯き気味でこう述べた。

「致し方ないな」

「一回の戦闘ですか」

「もう一個の艦隊は」

「第二四一艦隊です」

「彼等はまだ戦えないだろうな」

「おそらくは」

「損害が三割、そして負傷者もかなりの数で」

「では我々だけでやるしかないか」

「義勇軍を相手に」

「一回の戦闘とはいえ。大丈夫でしょうか」

「そういう問題ではない」

グレールは呻くようにしてまた述べた。

「大丈夫にするのだ、いいな」

「わかりました」

「それでは」

「戦闘用意に入れ。偵察艇を出せ」

彼は指示を出す。

「そして我が艦隊は前に出るぞ。よいな」

「了解」

「だが一度だけだ」

その声はやはり苦々しい。本来ならば金髪に緑の目を持ち引き締まった端正な顔である筈のその顔も苦々しいものになっている。それが今の彼等の置かれた状況を何よりも物語っていた。

第一七五艦隊は前に出る。全艦艇がグラールの指示に従い動く。

その中には空母ジャンヌⅡダルクもあつた。

第一七五艦隊の空母にしては損害が軽微だった。無傷と言っている。他の艦艇が大なり小なりダメージを受けているのに対してそれは奇跡とも言える程であつた。

実はこのジャンヌⅡダルクは第一七五艦隊においては非常に有名な艦となつている。不沈艦であると。幾多の死闘を潜り抜けてまだこれといったダメージを受けていないからである。

そのジャンヌⅡダルクもまた前に進む。その中で待機するパイロット達はレクレーシヨナルームにおいて出撃前のささやかな時間を過ごしていた。

「また戦闘なのはいいが」

気品のある口髭の男がまず口を開いた。

「我々だけで戦うことになるとはな」

「第二四一艦隊はほぼ戦闘不能、第四七二艦隊は消息不明」

若いパイロットが言う。

「これでは仕方ないでしょう」

「仕方ないか」

「今の状況じゃ。戦える艦隊がここにいるだけでも」  
「そうなるか」

「ええ。どうしようもありません」

若いパイロットはふう、と溜息をついてこう言った。

「負け続きですからね、我々は」

「最初から今までな」

中年の灰色の目の男が忌々しげに述べた。

「俺達勝ったことあったか？」

「残念ながら」

若い男は彼にも答えた。

「ありませんね、僕が覚えている限りは」

「そうだよな」

「連戦連敗だ、まさにね」

「ええ」

「お話にもならねえな」

灰色の目の男は大きく溜息を吐き出した。

「このままじゃオリンピックまで攻め落とされちまわあ」

「その可能性は大きいな」

口髭の男の言葉は決して悲観的なものではなかった。実際に連合軍の勢いはかなりのものでありそれを止めることができているからである。それではどうしようもなかった。

「どうしたものかね」

灰色の男はあらためて言った。

「こんなお話にもならねえ状況で」

「何とかするしかないですけどね」

「その何とかすらできはしねえ状況だ」

若い男に返す言葉に実にお寒い状況だ。

「今はな」

「とりあえずは今度の戦いを乗り切るしかないが」

「できるのかね、果たして」

それすらも保障出来ない。

「二割もなくなつた艦隊で圧倒的な敵軍を相手にしてよ」

「数はそれ程変わらないみたいですよ、今回は」

「相手が義勇軍でも同じこと言えるか？」

「いえ」

言える筈がなかった。義勇軍の圧倒的な強さは彼等が最もよくわかつている。本人達より敵の方が実際の強さはよくわかるものなのだ。

「しかもその後ろには」

「あの正規軍が山みてえに来るんだろうな、いつも通りよ」

「そうですね」

「数は向こうの方が圧倒的に上なんだ」

彼は言った。

「装備も物も何もかもな。こつちが連中に勝つてるもん何だ？」

「実戦経験とスピードですね」

「その実戦経験ある奴もどんどん死んでいる」

戦死者は鰻上りだ。パイロットに至つては連合のパイロットが一機撃墜される間にエウロパ軍は二十機は撃墜されている。数だけでなく装備や電子性能で大きく差が開けられている結果である。しかも連合軍の機体はどれも生存能力が極めて高く中々撃墜出来ないのだ。

全体として連合軍とエウロパ軍の損害の差はあまりもの状態になっている。正規軍と義勇軍を合せて一とするとエウロパ軍は十五だ。しかも正規軍と義勇軍の損害差は九倍にも達する。当然義勇軍が九で正規軍が一だ。結果として連合軍正規軍はまるで損害を受けていないのである。

「速度ついてもいつもこつちが先に見つかるしな」

「ええ」

偵察能力も哨戒能力も違う。とにかく馬鹿げた差なのだ。

「これで戦つても。今度だつてどうすれば」

「しかし戦わないわけにもいかないだろう」

「だから今ここで愚痴ってるんですよ」

どうやら階級は口髭の男がここでは最上位らしい。灰色の目の男の態度も礼節のあるものだった。

「お話にもならない状況ですから」

「アルテミスに入れば違いますかね」

「どうかね」

口髭の男は若い男に対しても同じような態度であった。

「あそこは防衛ラインが確かですから」

「ニーベルングよりもか？」

「いえ」

エウロパで最大の要塞だった場所である。それよりも上の防衛施設なぞエウロパにはない。だがそのニーベルングですら連合軍に何なく陥落させられているのである。

「ではわかるな」

「はい」

若い男は無念を込めて頷いた。

「過信は出来ない」

「絶望的ですね、本当に」

「何度考えてもな。それは変わらない」

「今度もどうなるやら」

「だがこの艦にいることに賭けてみるか」

「ジャンヌⅡダルクにですか？」

「そうだ、フランスを救ったオルレアンの少女」

この時代においてもフランスの英雄である。この艦隊はフランス出身者が多い為名付けられたのである。

「その加護に賭けてみるか」

「そうですね」

若い男が口髭の男の言葉に頷いた。

「ここは聖女の加護に」

「うむ」

「それに俺達にはワルキューレも一人いますしね」

「彼女か」

「そう、彼女ですよ」

灰色の目がようやく希望を見出して明るく光る。

「やってくれることを期待しましょうや」

「そうだな、今度の戦いは」

「オルレアンの少女とワルキューレの加護を信じて」

「やりましょう」

三人はそう言い合って頷き合った。とにかく今は誰の加護でもいいから欲しかった。そうした状況であったのだ。

今そのワルキューレは艦長室において艦長と話をしていた。小柄な金髪碧眼の美女であった。

### 第三章

彼女の名をエリザベート「デア」アルプという。エウロパ軍きつてのエースの一人であり今敗戦続きのエウロパ軍においては英雄視さえされていた。その彼女が今このジャンヌ「ダルク」の艦長と話をしていたのである。

「あと一回ですか」

「ええ」

ジャンヌ「ダルク」の艦長は女性である。名をエレオノール「ド」クレスパンという。三十代半ばの美しい女である。階級は大佐であった。

「今の状態ではね」

「一回」

「どのみち一回戦つて後はこの星系を離脱するつもりだったけれど、クレスパンは述べる。

「一回だけ、ということになると精神的にね。辛いものがあるわね」

「はい」

エリザベートはその言葉に苦い顔で頷いた。

「その一回も限られたものになりかねないですし」

「いえ、なるわ」

クレスパンはまた言った。

「まず撤退する第二四一艦隊を逃がす為に」

「私達は戦つて」

「そして素早く戦場を離脱するのよ」

「口で言うのは容易いですが」

「いざやるとなると困難なものね」

「しかも今の我が艦隊は」

エリザベートも自分がいる艦隊が今どういった状況なのかよくわかっていった。

「敵と戦うことすら困難です」

「それでも今この星系で戦える艦隊は私達しかいないから  
「仕方ありませんか」

「ええ。だから貴女もお願いね」

「わかつています」

その言葉には何の私心もなく頷いた。

「必ずやり遂げてみせます」

「辛い戦いだけれど」

クレスパンの顔が弱気になった。

「このジャンヌⅡダルクの不沈も何時まで続くかしらね  
「艦長」

エリザベートは弱気になった艦長に対して言った。

「その様なことは」

「御免なさい、艦長としては」

「はい」

「この戦いに志願した以上そんなことを言ったら駄目ね」

「そうです、御言葉ながら」

「エウロパの貴族として」

彼女は元々軍人ではなかった。フランスの公爵家の四女として生まれ大学を卒業後婚約者と結ばれそのまま幸せな家庭を築いていた。だがこの戦争で夫が重傷を負い、彼女が戦場に向かうことを志願したのである。実際の彼女は夫との間に二人の女の子がいる優しい母親である。そもそもが軍人ではないのだ。

「毅然として」

「そうです、何があっても」

「立ち向かわないとね」

「では艦長」

「ええ」

エリザベートの言葉に頷く。キリツとした顔になっていた。  
「今度の戦いもエウロパ軍に恥じない戦いを」

「エウロパの為にです」

「じゃあ戦いの前に」

ここで彼女はベルを鳴らした。すぐにまだ二十にもなっていない少女の従兵がやって来た。

「お呼びでしょうか、奥様」

「ちよつとリュシエンヌ」

クレスパンは自分を奥様と呼んだその従兵に苦笑いを浮かべて言った。

「今はお屋敷にいないから」

「失礼しました」

それを受けて言葉をあらためる。

「お呼びでしょうか、艦長」

「ええ、メリジエーヌ二等兵」

彼女もこつそりと呼び方を変えていた。リュシエンヌとはいつも屋敷等と呼んでいた名前でありメリジエーヌが姓なのである。軍にいる時の呼び方に変えたのだ。

「ワインはあるかしら」

クレスパンは優しい声で彼女にそう問う。

「ワインでございますか」

「あれば出して欲しいのだけれど」

「畏まりました」

メリジエーヌはそれを受けて艦長室の端の棚からクリスタルのグラスを二つとボトルを二本取り出す。そしてチーズやハムも出してきた。

「これで宜しいでしょうか」

「このワインは」

「ルルド産です」

メリジエーヌは主の問いに答えた。

「それで宜しいでしょうか」

「ええ、有り難う」

気品のある笑顔でそれに応える。その顔を見るとどうにも軍人には見えない。高貴な家の奥方に見える。実際そうなのであるがやはり戦場に出るにはいささか頼りない外見ではあった。

## 第四章

ワインとチーズが二人の前に出される。グラスに白い液体が注がれる。

「ルルドの白よ」

「これがですか」

エリザベートはその白ワインを眺めながら応えた。ルルドはフランスの一地方である。穀倉地帯でありワインでも名の知られた星系なのである。

「ええ」

クレспанはグラスを持ちながら頷いた。エリザベートもそれを受けてワインを手に持つ。

「まずはね」

「はい」

杯を打ちつけ合った。そしてそのワインを口に含む。

「どうかしら」

「かなり甘いワインですね」

「まずはそれに気付いた。」

「こんな甘いワインははじめてです」

「ルルド産はね、そうなのよ」

クレспанは優しげで気品のある笑みのままそれに答えた。

「甘くて飲みやすい」

「はい」

「主人も好きなのよ」

「クレспан侯爵もですか」

彼女の夫である。だから彼女は普段はクレспан侯爵夫人と呼ばれているのである。

「今はね、ちょっと飲めないけれど」

クレспанはそう話して少し寂しげで悲しい顔になった。夫が怪

我をしたのを悲しく思っているのだ。

「傷が癒えたらまた二人で飲みたいわね」

「その為にも」

「この戦いを乗り切って」

「はい、ジャンヌ・ダルクの加護を信じましょう。オルレアンの少女を」

「それだけかしら」

「!?!」

クレスパンのその言葉に一瞬であったが動きを止めた。

「あの、それは」

「ワルキューレもいる筈だけれど」

エリザベートに顔を向けて言う。グラスとワイン越しにエリザベートの整った顔が見えていた。それはクリスタルとワインの中で不思議な美しさを見せていた。

「ワルキューレは何をしてくれるのかしら」

「オルレアンの少女に加護を」

エリザベートはそれを受けてこう言った。

「信じる神は違いますがエウロパの為に」

「そして第一七五艦隊の為に」

「戦ってみせます」

「期待させてもらおうわ」

「わかりました」

二人は決意を見せ合って杯を重ねた。戦いの前の美酒であった。

それが終わった時第一七五艦隊の司令部に偵察に出していた艦艇から報告があがってきた。

「第四七二艦隊を発見しました」

「無事だったのか」

「いえ」

だが無事かどうかはすぐに否定された。

「無事というにはこれは」

「どういった状況なのだ？」

クレールはその艦艇の艦長に問うた。

「第四七二艦隊は」

「まず数は半分もありません」

「半分もか」

「はい、そして残っている艦艇も殆どが損傷しています」

つまり戦力としてはもう成り立っていないということであった。

「中には動いていることすら不思議なものも。これではもう」

「よし、わかった」

クレールはそこまで聞いたうえで頷いた。

「ではそちらに向かう。いいな」

友軍を救出することを決定した。彼は困っている味方を見捨てるような男ではなかったのだ。

「まずは味方を助け出してからここを去るぞ」

「無論です」

そして周りにいる者達もまた。それは同じであった。

「だからこそ我々は」

「エウロパ軍なのですから」

「エウロパ軍の誇りにかけてだ」

エウロパ軍の軍規にもあるのだ。味方を見捨てることがないようにと。だが彼等は。軍規以前にそれを決断していたのである。軍人というよりも騎士としてだ。

「まず第四七二艦隊を逃がし」

「はい」

「それからこのトリトンを退く」

「わかりました」

「それでは」

「敵艦隊はどれだけだ」

「四個艦隊です」

「そうか、数は多いな」

それを聞いても何ら臆してはいない。

「そして義勇軍も一個艦隊が近付いている」

「普通に戦っては勝ち目はありません」

「何、一戦を交えるだけだ」

クレールはもう覚悟を決めている。それで怖気づくということはない。

「それだけでいい」

そのうえで指示を下した。

「友軍を救う」

それだけであつた。だがそれだけで充分だつた。それが今の彼等の目的の全てだつたからだ。今第一七五艦隊は大きく前に出た。そして一旦第四七二艦隊と連絡を取つた。

「最高指揮官は誰だ？」

「私です」

出て来たのは少将の軍服を着た若い男であつた。

「卿か」

「はい、第四七二艦隊司令官代理オットー・フォン・リップンドロップ、階級は少将です」

「そうか」

「今は私が艦隊の責任者であります」

普通艦隊司令は中将以上が務めることになっている。それなのに少将が最高指揮官になっているとは。それだけでこの艦隊がどういった状況に置かれているかがよくわかつた。

## 第五章

「卿等に言いたいことがある」

「それは一体」

「下がれ」

それがクレールの言葉だった。

「今まで御苦労だった。今は下がれ、いいな」

「有り難うございます」

リップンドロップはそれを聞いて穏やかな感じの笑みを浮かべた。

「もう駄目かと思っていました」

「後は我々が引き受けるからな」

「連合軍は今は何とか振り切りましたが」

彼は言う。

「それも一時的なこと。おそらくはもう」

「敵艦隊に見えられました」

警報が艦橋内に響き渡る。それこそが何よりの証であった。敵に

捕捉されたのだ。

「こうなるのだな」

「はい」

リップンドロップはクレールの言葉に頷いた。

「敵の数はかなり多いですので」

「四個艦隊だな」

「そうですね、その数だけでもう」

「だがいい話がある」

ここでクレールは悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「いい話!？」

「そうだ、義勇軍も来ているのだ、ここにな」

「彼等までですか」

「これで言いたいことはわかるな」

「ええ」

「今すぐにだ。トリトンに入ってそこからアルテミスに向かえ」

「わかりました。では」

「アルテミスでな」

「はい」

それが今の彼等の合言葉になっていた。敗戦続きの彼等はアルテミスに集結しようとしていたのだ。だから今こうしてアルテミスで会おうと言ったのだ。ヴァルハラも出ることはあるが。だがそれはまだ早かった。彼等はまだ戦うつもりであったからだ。この世において。

「敵艦隊来ます」

前に出て来た第一七五艦隊全体に報告が入る。

「四個艦隊です」

「報告は正確だな。いいことだ」

クレールは表情を変えることなく報告にそう返した。

「それに北北西、上六三度のところからも敵艦隊」

「義勇軍か」

「はい、彼等がまず来ます」

「四個艦隊はまず間合いを取ろうとしています」

「連合軍のいつもの戦法だな」

クレールはそれを聞いて呟いた。まず義勇軍が打撃を与えて一旦離れた後で正規軍が砲艦とミサイル艦による一斉攻撃の後戦艦の砲撃、巡洋艦と駆逐艦の魚雷攻撃を経てそれから艦載機の総攻撃で止めを刺す。彼等の必勝戦術であった。数とこの形式化しながらも圧倒的な火力で攻めるこの戦術により実戦経験のない彼等は勝っているのである。

「それでまた勝つつもりか」

「おそらくは」

「だがこちらもそうおいそれと勝たせてやるわけにはいかん」

クレールは顔を上げたままだった。

「敵の正規軍は動いていないのだな」

「はい」

参謀達はそれに応えた。

「よし。ならば」

それを聞いて彼は自身の艦隊の行動を決めた。

「奴等のことだ。こうした事態もまたマニュアル化していると思っ  
が」

「どうされるのですか？」

「前進だ」

「前進！？」

「そつだ、義勇軍に向けて前進する」

「まことですか！？」

「義勇軍相手に」

「この状況で冗談を言えると思うか？」

クレールは驚く彼等に逆にそう問うた。

「今の我々の置かれた状況で」

「いえ」

「やはりそれは」

参謀達はその言葉に首を横に振った。今彼等は圧倒的な数の敵軍と傷ついた自軍という状況なのだ。こうした状況では。冗談なぞ言える筈もない。

「安心しろ、少し戦うだけだ」

「少しですか」

「時間だけはな」

クレールはその顔に不敵な笑みを浮かべていた。

「時間は少しだがその攻撃は」

「この上なく激しく」

「一度の攻撃で全てをぶつける」

彼は言い切った。

「そして。退く」

「一撃離脱というわけですか」

「それでいいのだ」

「大胆ですな」

部下達はその豪胆に感嘆というよりは呆れを見せた。

「五倍以上の敵を前にして」

「しかもあの義勇軍に向かわれるとは」

「では正規軍に向かうか？」

彼は部下達の言葉に逆に問い返した。

「そうすればかえって危険なことになるぞ。敵は四倍だ」

「四倍」

まずその物量差に言葉を失う。

「四倍の敵に立ち向かうわけにもいくまい」

「はい」

「確かに」

「我々は死に行くのではない。生きなければならないのだからな  
そうなのであった。彼等は生きなければならない。生き残ってま  
た戦わなくてはならない。クレールが言っているのはそれであるの  
だ。彼等は生きる為に戦っているのだ。」

「わかったな」

「わかりました」

「では。強敵に一撃を与えに行きますか」

「そうだ。全速で向かう」

行くからには躊躇は無用である。

「そして倒す」

「第四七二艦隊は今安全圏にまで入りました」

「よし」

その報告が大きな励みになる。

「では後は彼等を足止めするだけだ」

「攻撃を加え」

「その足を止める」

その為の攻撃であった。今ここで退いてはむざむざと追撃を受けてしまう。それも読んでいた。全て読んだうえでの攻撃であるのだ。「全軍全速」

クレールの指示が下る。

## 第六章

「目標、上方の敵」

「目標、上方の敵」

命令が復唱される。

「いいな、一撃だぞ」

その言葉をくどいまでに繰り返す。

「それで決める。いいな」

「はい」

「一撃で敵を止める」

「中々スリルがある戦いですね」

部下達の中には不敵な笑みを浮かべる者までいた。どうやらクルールの豪胆というか向こう見ずさが移ってしまったようである。影響を受けたのかはたまたまた感化されて眠っていたものが目覚めたのかそれはわからない。だが彼等は今もう決めていたのであった。

第一七五艦隊は全速力で義勇軍に突き進む。その中にはジャンヌⅡダルクもいた。

エウロパ軍の空母は連合軍のそれとは違い対艦攻撃能力も高いものを持っている。その為ジャンヌⅡダルクも戦闘態勢に入っていたのである。

「バリアーを前面に集中させて下さい」

クレスパンは艦橋にいた。そこで前を見据えながら指示を下す。

「そして砲門を」

「了解、砲門開け」

指示が伝えられる。それと共に攻撃用意が行われる。

「パイロット達も戦闘配置に」

「はい」

航空長がそれに頷く。それにより待機していたパイロット達が次々にエインヘリヤルに乗り込む。戦いの準備は整おうとしていた。

「今度ばかりは正気じゃねえな、おい」

あの灰色の目の男が自身のエインヘリヤルに乗り込みながら同僚達に話をしていた。

「義勇軍に自分から突っ込むなんてよ。尋常じゃないぜ」

「戦争らしくていいじゃないか」

その言葉に口髭の男が返す。彼もまた出撃準備に取り掛かっていた。

「無茶は承知のうえだろ？命のやり取りだ」

「まあね」

灰色の男はその言葉に不敵な笑みで返した。実はこうしたことが嫌いではないようである。

「だからここにいるのさ」

「けれど生きて変えれますかね」

「安心しろ、俺達がいる船は何だ？」

若い男に尋ねる。彼はパイロットスーツを着て少しオドオドした様子であった。

「ジャンヌ＝ダルクです」

その声のまま答える。

「そうだ、ジャンヌ＝ダルクだ」

灰色の男はニヤリと笑ってこう言った。

「それが答えだ、いいな」

「それがって」

「戦争つてのはな、結局運なんだよ」

昔からよく言われている言葉を口にした。周りではその運に全てを預けるしかない男達が次々とある時は愛機、そしてある時は棺桶になる銀のボディに乗り込んでいた。

「運がいい奴が生き残って運の悪い奴が死ぬ」

「それ、よく聞きます」

「そうだろう。俺達にはその運がある」

「不沈艦ジャンヌ＝ダルク」

「オルレアンの少女だ。ここはそれの加護に頼ろつぜ」

「フランス人はそれでいいですよね」

「どうした？」

「イギリス人はどうしたら」

「おめえイギリス人か？」

「いえ、アイルランドですけれど」

「だったら大丈夫じゃねえか」

アイルランドはイギリスと古くから因縁がある。仇敵同士と言っても過言ではない。

「イングランドじゃねえんだつたらよ」

「まあそうですけれど」

「イギリス人はイギリス人の女神に運を任せるんだな」

灰色の男はこの中にイギリス人もいることを承知のうえであえてこう言葉を出した。

「クイーンⅡエリザベスなりクイーンⅡビクトリアなりな」

「両方共戦場には出ていませんけれど」

「そうか、じゃあ女装したネルソンだな」

「気持ち悪いだけですよ、それ」

「じゃあチアガールで我慢しておくんだな」

灰色の男の言葉は冗談にしてはやけに下手なものであった。正直誰も笑ってはいない。

「俺達はジャンヌⅡダルクだ」

「いや、もう一人いるぞ」

「いたか!？」

口髭の男の言葉に声と顔を向けさせた。

「ワルキューレがな」

「ああ、そうだったな」

灰色の男はそれを聞いてまた不敵な笑みを浮かべた。

「いたな、とびっきりの女神様が」

「彼女がいるなら恐れることはない」

「ああ」

彼等だけでなく他のパイロット達もその言葉に励まされる様に  
えた。

「来たぜ、その女神が」

「ああ」

「彼女がいればな」

エリザベートがやって来た。パイロット達は彼女の姿を認めてそ  
れぞれ言う。

「生き残れる」

「そして戦い抜ける」

「行くぜ、こつちには勝利の女神がついているんだ」

灰色の男がここで言った。今度は上手い言葉だった。

「絶対生きて帰るぜ」

「よし」

「総員出撃」

いいところで放送が入った。

## 第七章

「これから艦載機による攻撃を仕掛ける。総員配置につけ」

「よしきた」

「遂にか」

「少佐、それでは」

「わかった」

エリザベートも乗り込む。まだ成人に達していない若い整備兵に  
応える。

「今度も。頑張ってくださいね」

「出来ることをするさ」

エリザベートの返事はこうであった。

「私的な」

「頼みますよ、勝利の女神」

「勝利の女神か」

閉じられるエインヘリヤルのコクピットの中で呟く。

「ジャンヌIIダルクだけでは駄目なのかな」

ふとそう呟いた。そして彼女自身も銀河へと出た。

既に戦闘は接近戦になっていた。義勇軍の方も今空母から艦載機  
が発進していた。

「また派手に来てやがるぜ」

灰色の男がその艦載機の大軍を見て嬉しそうに笑う。

「戦闘機に攻撃機、そして爆撃機」

「電子戦機もいますね」

「用意のいいこつた、毎度毎度な」

若い男にそう返す。

「いいか？」

口髭の男が他の者に指示を出す。

「我々は戦闘機を相手にする。まずは奴等を迎撃する」

「爆撃機とかはどうしますか？」

「そちらは他の艦の部隊が担当する。我々の担当は戦闘機だ」  
「簡単に言ってくれるぜ」

灰色の男はそれを聞いてついつい悪態をつく。

「あの真つ黒な連中を相手にするのは中々骨が折れるんだぜ」

義勇軍はその兵器を漆黒に塗装していることで知られている。その為戦闘機のタイガーキャットもまた漆黒の姿をしているのである。

「普通のタイガーキャットとは違うからな」

「すぐにも敵からの先制攻撃が来るぞ」

口髭の男から注意が飛ぶ。

「ミサイルでな」

「お決まりの攻撃ってわけかい」

「まずはそれを乗り切らないと」

「絶えず動け」

まずはこう指示が飛んだ。

「そして電波妨害を仕掛ける、いいな」

「もうやってますよ」

灰色の男はすぐに言い返した。

「さもないと死ぬのはこっちですからね」

言いながらエインヘリヤルを動かす。同時に電波妨害装置のスイッチを入れる。

だがそれは上手くはいかなかった。それが上手く作動しないのだ。

「チツ、やっぱりな」

「敵の電子戦機ですね」

「何でもかんでも贅沢にやってくれる連中だぜ」

灰色の男は顔を顰めさせて悪態をついた。

「艦載機だけでも何種類あるってんだ、しかも鬱陶しいやつばかりよ」

「ロックオン、来ます」

「チツ」

機内に警報が鳴り響き画面が真っ赤になる。

「全機回避運動に移れ。いいな」

「了解」

「迎撃はそれからだ。卿等の健闘を祈る」

ジャンヌ・ダルクのインヘリヤル隊が散開するとすぐにタイガーキャットのミサイルが飛んで来た。それは一機辺り幾つという途方もない数で襲い掛かって来た。

「撒け！」

咄嗟に各機アンチミサイルを出す。それで敵のミサイルを防ごうとする。

これである程度は防がれた。だが全てを防ぐのは不可能だ。それでもかなりの数のミサイルが迫って来る。

「電波妨害は！」

「駄目だ、相変わらずだ！」

「チツ、艦艇は何やってるんだ！」

「その艦艇が次々にやられてるんだよ！連絡もとれねえ！」

「ここでもいつも通りかよ！」

いつものパターンでの敗北。それにパイロット達は苛立っていたのだ。周りではもう僚機、そして自軍の艦艇が激しい攻撃を受けていた。そして次々と炎となって銀河の中に消えていた。

「駄目です、避けられません！」

悲鳴が飛ぶ。

「脱出しろ！」

口髭の男が部下に叫ぶ。

「間に合うか！？いいな！」

「は、はい！うわああ！」

「どうした！」

そんな言葉に一瞬ギクリとなる。戦死したのかと思った。

「いえ、何とか脱出出来ました」

「そうか、驚かせるな」

その言葉を聞いてほっと胸を撫で下ろす。

「心臓に悪いだろうが」

「すみません」

「他の機体はどうなったか？」

そのパイロットが何とか生きているのを確認してから他の者達に問うた。

「生きているか？」

「撃墜されたのは二割ってところです」

灰色の男から報告があがった。

「二割か」

「まあ生き残ってるのもいればそうでないのもいるでしょうね」

「わかった。ではまず残った機体は集結しろ」

「了解」

「わかりました」

若い男も何とか生き残っていた。そしてその中には当然のようにエリザベートもいた。

「相変わらずとんでもない攻撃ね」

タイガーキャットの攻撃をかわし終えて言う。

まずはミサイルの総攻撃で敵の数を大きく減らす。それが連合軍、そして義勇軍の戦闘機部隊の戦い方なのだ。彼等はまずそうしてから突入して来るのだ。

## 第八章

本来ならば今ので部隊は半減している筈だった。しかしそれが二割で済んだのはジャンヌ・ダルクのパイロット達の技量によるところが大きかった。だがそこには運もあつたのは確かであろう。

運がなければ死んでいる。そうした紙一重というものが戦場には確かにあるのだ。そういう意味ではエリザベートは運がいい。しかし彼女は運だけのパイロットではないことは誰もが知っていることであつた。

多くの激戦を潜り抜け敵を倒してきている。その技量もまた相当なものなのだ。だからこそだ。彼女はワルキューレとさえ呼ばれているのだ。

そのワルキューレが舞う。群れを為して迫る敵軍の前で。今一機のエインヘリヤルが敵の中に突っ込んだ。

「あれは」

「アルプ少佐の機か」

ジャンヌ・ダルクのパイロット達はそれを見て声をあげる。

「そうか、まずは突っ込むってわけかよ」

「面白いことしてくれんじゃねえか」

エリザベートの同僚達は彼女の突進を見て口々に言う。

「じゃあ俺達も行くか」

「よし」

「死中に活ありってやつだな」

「隊長」

「わかっている」

口髭の男が部下に伝える。

「全機突撃だ」

「よしきた」

「アルプ少佐に続くぞ、いいな」

「了解！」

「じゃあ一気に行くぜ！」

ジャンヌ・ダルク隊はエリザベートに続く。その前ではもうエリザベートが最初の一機に攻撃を浴びせていた。

「くっ、このエインヘリヤル！」

アラビア語での苦渋の音がコクピットの中に響く。

「何て度胸してやがる！一機で来るなんてよ！」

「おい、大丈夫か！」

エリザベートの攻撃を何とかかわしたところで同僚から通信が入って来た。

「ああ、何とかな」

「そうか、だったらいいがな」

返事が返って来ると通信の向こうから安堵の声があがった。

「心配してくれるのか？」

「馬鹿、違うぜ」

それはすぐに否定された。

「御前には借りがあるからな。野球の」

「チエツ、覚えてやがったのか」

それを聞いて舌打ちする。

「忘れたらいいのによ」

「生憎だが忘れねえぜ」

「じゃあ俺が死んでもいいのかよ」

「死ぬのなら金返してからにする」

返事は実にシンプルであった。

「いいな」

「有り難いこつて」

「それよりもそのエインヘリヤルな」

「ああ」

話は戦場に戻った。

「やばいぞ。ワルキューレだ」

「あいつかよ」

義勇軍の間でもワルキューレと言えば誰なのか、すぐにわかるようになっていた。

「エリザベート」デア「アルプ中佐だ。今俺達が相手にしているのは空母ジャンヌ」ダルクの部隊だからな」

「不沈の乙女かよ」

「その乙女と共に部隊を守る女神だ」

「有り難いね、そんなのが目の前にいるなんて」

「とりあえずその女の相手は止めておけ」

「そういきたいんだがな」

エリザベートの攻撃は執拗であった。何度も攻撃を仕掛け激しいドッグファイトを挑んでくる。

## 第九章

「相手が離しちゃくれねえ。こんな時だけ女にもてるな」

「今から俺も行く」

同僚はそう言ってきた。

「それまで持ち堪える。いいな」

「前向きに善処するぜ。まあやられたら極力脱出するからよ」

「わかった、その時は拾ってやる」

「頼むぜ」

彼だけでなく数機がエリザベートのエインヘリヤルに向かう。忽ちのうちに五機ものタイガーキャットに取り囲まれてしまった。

「幾らエース中のエースでもな」

取り囲んだタイガーキャットの中の一機に乗る男が言う。

「五機のタイガーキャットに適うかよ」

「これならいけるぜ」

「ワルキューレの最後だ」

五機はエリザベートを完全に包囲した。それからそれぞれドッグファイトを挑む。

「タイガーキャットは攻撃力だけじゃないんだぜ！」

「スピードも格闘性能もこっちの方が上だ！それを教えてやる！」

その巨体に似合わぬ旋回性能を活かして攻撃を仕掛ける。ビームバルカンが続けざまに放たれる。

「これなら！」

「逃げられるかよっ！」

それぞれのポジションから一斉に攻撃を仕掛ける。これには流石のエリザベートも駄目かと思われた。

だが。やはり彼女はワルキューレであった。

「!?!」

「なっ!?!」

消えた。突如として消えたのだ。彼等が気付いた時には。エリザベートは上にいた。

「おい、上だ！」

「何っ！？」

仲間の一人の声に他の四人が慌てて顔を上げる。

「何時の間に！」

「上にすり抜けたのか！」

何故彼女が自分達の上にいるのかわかった。咄嗟に急上昇しビームバルカンの攻撃をかわしたのだ。それも紙一重で。まさしく神業であった。

それは彼等のコクピットのコンピューター映像にはつきりと出ていた。その動きの軌跡が。それを見ているからこそ驚きを隠せないのである。

今度はエリザベートの番だった。上から攻撃を浴びせる。

「この位置なら！」

上から下へ弧を描きながら攻撃を仕掛ける。二機はそれを運よくかわすことが出来たが後の三機はそうはいかなかった。

「うわっ！」

「くっ、エンジンをやられた！」

「おい、脱出しろ！」

「悪いがそうさせてもらっせ」

攻撃を受けた三機のうち二機は小破で済んだが一機はそうはいかなかった。エンジンに攻撃を受けていたのだ。見れば最初にエリザベートと戦ったあの男の機だった。

「ったく、運がないぜ」

仕方なさそうにそう呟く。

「この戦いで敵を三機位撃墜してボーナス貰おうと思ってたのによ」「それで俺に借りた金を返すつもりだったんだな」

「いや」

それはすぐに否定した。

「まさか」

「まさかっておい」

「それで女の子の店に行くつもりだったんだよ。それがパーになっちまった」

「そのまま命までパーになっちまえ」

「思わずその言葉が口に出た。」

「俺に金を返す方が先だろうが」

「冷たいな、おい」

「そういう言葉はまず金からだ、金は命だ」

「さもしいねえ」

「さもしいのは借りた金を返さないその根性だ」

「ちえっ」

彼は何だかんだで救出された。その間にエリザベートは次々と敵機を翻弄し撃墜していく。その技量は見事の一言であった。誰も近寄せない。

「ワルキューレがどうしたってんだ！」

その彼女に向かう者達もいる。

「俺達だつて義勇軍だ！」

「その名にかけて！」

漆黒のタイガーキャットが数機正面から向かう。不意にその前から消えた。

「！？何処だ！？」

「何処に消えた！？」

咄嗟にリーダーを見る。そこに示されたエリザベートの機体に気付いた時。彼等は負けていた。

エリザベートのワルキューレは下にいた。そこから急上昇を仕掛けビームバルカンを放つ。それで彼等は終わりだった。

「だ、脱出する！」

「覚えてろよ！」

愛機を撃墜され止むを得なく脱出していく。生存能力の高いタイ

ガーキヤットだからこそ助かっている。そうでなくてはこれで死んでいただろう。彼等は実に運がよかった。

## 第十章

「戦死した敵のパイロットは少ないようね」

それはエリザベートからも確認されていた。

「もう何機も撃墜したのに」

「十機だ」

口髭の男がそれに答えた。彼がジャンヌ・ダルク隊の指揮官なのである。

「卿は十機撃墜している」

「そうですか、そんなに」

これは戦っている本人には気付かないものであった。言われてようやく気付いたのだ。見ればコクピットの撃墜カウンターにもはつきりとそう出ていた。間違いなかった。

「だが敵の戦死者はいないな」

「また戦場で、ということですか」

「敵もしぶとい」

隊長は答えた。

「そう容易にはやられてくれん」

「そのようですね」

「そしてだ」

「はい」

話はここで変わった。

「こちらに敵のエースが来た」

「エースが」

「シフル・ザ・ヒダン少佐だ」

「彼がここに来ていたのですか」

「どうやらな」

義勇軍きつてのエースだ。彼により屠られた戦友は数え切れない。エウロパ軍のパイロット達にとっては不倶戴天の敵の一人である。

「悪いがこちらに来てくれ」

「わかりました」

エリザベートはそれに応える。

「彼が相手ならばこちらも」

その整った目が強く光る。

「戦いがいがありますから」

「では頼むぞ」

隊長は言った。

「彼は卿に任せる。強敵だがな」

「望むところです」

それに対するエリザベートの言葉は堂々たるものだった。

「彼が相手ならば不足はありません」

声も笑っていた。

「是非共向かきましょう」

「では宜しく頼むぞ」

「無論」

エリザベートのエインヘリヤルのバーナーのスイッチが入った。

「今からそちらへ」

「頼む」

エリザベートは愛機を駆りそのまま好敵手のいる戦場へ向かう。

そこには一機の黒いタイガーキャットがもついた。

「聞いているぞ」

エリザベートのエインヘリヤルに通信が入って来た。そのタイガ

ーキャットからだった。言葉はラテン語だった。

「貴官がエリザベート」デア」アルプ少佐だな」

「如何にも」

エリザベートはそれに答える。

「卿はシフル」ザーヒダン少佐だな」

「卿とは呼ばなくていい」

ザーヒダンはそれに余裕のある口調で返す。

「連合には爵位はないしな。無論我々難民達にもだ」

「だからいいというのか」

「そうだ。そのうえで貴官に申し込みたいことがある」

「それは何だ？」

「一騎打ちだ」

ザーヒダンはニヤリと笑ってこう述べた。

「エウロパ軍きつてのエースである貴官と剣を交えたい。いいか」

「エウロパ軍には軍律がある」

彼女はその申し出を聞いてまずは軍律を出した。

「敵から正々堂々たる申し出があった場合快く引き受けよと。そし

て正々堂々と相手すべしと」

「騎士道というわけか」

「そうだ」

彼女は女ではあっても騎士だった。今騎士としてザーヒダンに接しているのだ。

「卿……いや、貴官の申し出喜んで受けよう」

「有り難い」

ザーヒダンはその言葉を聞いて満足そうに頷く。

「そうでなくてはな。戦いは互いの力を出し尽くして行くもの」

彼は言う。

「だからこそ美しいのだ」

「それは同意だ」

ザーヒダンを見据えて答える。

「だからからこそ容赦はしない」

「容赦なぞ不要だ」

ザーヒダンも言い返す。

「こちらは全力で貴官を倒したいのだからな」

「いいわ、それで」

これこそエリザベートが待っていた言葉であった。

「では名乗りは終わりね」

「うむ」

「行くわよ、ザーヒダン少佐」

「こちらこそだ、アルプ少佐」

互いの愛機がそれぞれ動きはじめる。銀河の中に二つの流星が巡り合い、ぶつかり合おうとしていた。

## 第十一章

まずはザーヒダンのタイガーキャットが仕掛けてきた。派手にビームバルカンを放つ。

「まずは一撃だ！」

彼は攻撃を繰り返しながら言う。

「この程度、かわせなくてはエースとは名乗れまい！」

「その通り！」

エリザベートもそれに返す。

「それはこちらの台詞でもある！ザーヒダン少佐、覚悟！」

「むっ！」

エリザベートが反撃に転じる。派手な旋回を見せる。

「ほう」

ザーヒダンはその旋回を見て呟く。

「まるで妖精の舞いだな。実に美しい」

華麗に右に左に旋回しながら迫る。それを前にしてもまだ冷静さを保っていた。

「だが。それはこちらもだ」

「むっ！？」

ザーヒダンのタイガーキャットもまた動きはじめた。こちらは一直線の動きであった。

「そちらが妖精の舞いならば」

彼は自機を操りながら言う。

「こちらは稲妻だ。何も攻撃は舞うだけではない」

「直線か」

「そうだ。かつて多くの戦いで培ってきたこの攻撃、かわせるか  
そのまま突っ込みながらエリザベートを見据える。

「ロックオン、完了」

「来る！」

エインヘリヤルの中で警報音が鳴り響く。それが何を意味しているのか、言うまでもない。

「どれだけ動こうとも。的は一つ」

ザーヒダンは全速力で突っ込みながら言う。妖精の舞いの動きを完全に読んだうえでの一直線の動きであるのだ。

「ならばそれを撃つだけ」

「まずい！」

エリザベートは咄嗟に動いた。その時彼女は無意識のうちに自分でも信じられない動きを見せた。

「ムウツ！」

ザーヒダンはビームバルカンのスイッチを押す。押された瞬間にもう無数のビームが放たれる。だがそれは。目の前に突如現われた数機のエインヘリヤルによりあえなくすり抜けられただけであった。「馬鹿な、分かれた!？」

彼は目の前に現われたその数機のエインヘリヤルを見て目を見開かせる。

「だ、だが」

モニターを見ればそこに映っているのは一機だけだ。目の錯覚である。

「だがこれは……」

エリザベートは自機を咄嗟に左右に素早く動かしたのだ。それにより残像が出来ていたのである。

無論それだけの動きである。ロックオンは強制的にはずされ攻撃は空しく失敗した。全てはエリザベートの咄嗟の動きの為であったのだ。

「これ程までの動きを見せるとはな」

「かわせたみたいね」

エリザベートは自身がまだ生き残っているのを確認してまずは安堵の息を吐き出した。

「運がいいと言うべきかしら」

「いや、これは実力だ」

ザーヒダンはまた彼女に通信を入れてきた。

「実力!？」

「はじめて見せてもらった。分身というものをな」

彼は言う。

「サハラでも連合でも。見たのははじめてだ」

「分身………私が」

「どうやら自分でもわかっていないようだな」

「とりあえず助かったのはわかってるわ」

エリザベートの答えはこうであった。

「何とかね」

「だがその何とかを掴むのもまた実力だ」

ザーヒダンはまた返す。

「どうやら貴官は。私が思っているよりも、そして噂よりもずっと

凄腕のようだな」

「それで戦いが楽になればいいけれどね」

不敵に笑ってまた返す。

「生憎そうはいかないみたいね」

「だが。今は生き残ることが出来るだろう」

また態勢を変える。攻撃ポジションに戻った。

「私を倒せばな」

「どうあっても退かないつもりね」

「そうだ」

その目は再びエリザベートのエインヘリヤルを見据えていた。そ

れから離れることはない。

「貴官を倒してな」

「なら私も」

もう舞いは見せるつもりはないようであった。その傾向が見られ

ない。

「一気に行くわ」

「この一撃で決める」

二人は互いの正面に出た。それぞれを阻むものは何もなかった。

「この戦いに勝った者が生き残る」

「恨みつこなしね」

緊張がその場を支配していく。二人だけの世界となっていく。

「参る！」

「これで！」

その緊張が頂点に達する。するとその瞬間に両者は動いた。

間合いに入るとすぐに攻撃がはじまった。ビームバルカンが火を噴く。だがそれも一瞬のことで影が交差した。それが通り抜けた時、勝負は決まっていた。

「命だけは助かったようだな」

ザーヒダンはコクピットの中でまずは呟いた。

「おめでとうと言っべきか」

「そうね」

それにエリザベートが返す。

「どちらか、或いは両方が死ぬと思ったけれど」

「二人共生き残るとはな。これはどういう意味か」

「また戦えという意味なのでしょうね」

二人は静かにやり取りを続ける。

「今度出会った時に」

「ではそうさせてもらうか」

ザーヒダンは笑いながら言った。

「ではな」

「ええ」

ザーヒダンのタイガーキャットが動き脱出ポッドが飛ぶ。主を失くした彼の愛機はそのまま銀河の奥底へ落下していきそのまま消えて行く。それがエリザベートと彼の勝負の終わりであった。

「これでここでの戦いは終わりかしら」

「アルプ少佐」

呟いたところで通信が入る。

「はい」

「返事があるところを見ると生きているようだな」

「私はワルキューレですので」

くすりと笑ってそれに応える。

「ヴァルハラに行くことも帰ることも出来ますので」

「そうか、それは何よりだ」

「それで何かあったのですか」

彼女は問う。

「何、帰還だ」

「戦闘終了ですか」

「そうだ、すぐにジャンヌⅡダルクに戻ろう」

髭の隊長は言う。

「いいな」

「わかりました」

エリザベートもそれに頷く。

「全機帰還だ」

正式に命令が下る。

「了解」

それに従いジャンヌⅡダルクのエインヘリヤル達は戦場を離脱していく。他の艦のエインヘリヤル達も。彼等はそのままそれぞれの艦に戻ると艦もまた全速力で戦場を離脱していく。戦いを終え速やかに撤退にかかったのであった。

## 第十二章

「下がるか!？」

それは義勇軍からも確認されていた。

「まだ戦いはこれからだというのに」

「おそらく作戦目的を達したからでしょう」

いぶかしむ艦隊司令に対して艦隊の参謀長が答える。

「作戦目的」

「それは時間稼ぎかと」

「退く友軍への援護か」

「はい、今あのトリトン星系には三個の艦隊がいる筈ですが」

「一個は離脱、そして一個は」

「今まで友軍に追われてかなりのダメージを受けております」

「つまり戦えるのはあの艦隊だけだったということか」

「はい」

参謀長は答えた。

「だからこそ彼等は戦い、そして今」

「退いているというわけだな」

「それには丁度いい頃だったと思われます」

「時期だったか」

「そういうことです」

「一戦交えてか」

「それも派手に」

さらに言葉を続ける。

「我等が驚き、足を止めている間に」

「敵ながら見事と言っべきか」

その心意気に感心しているのはこの司令の武人の心故であるうか。

だとすれば中々の男である。

「では追撃に」

「といつても間に合うかな」

既にエウロパ軍は撤退にかかっていた。もう砲艦やミサイル艦の攻撃も届かない範囲にまで去ってしまった。今攻撃を仕掛けても照準が定まらず効果は期待できそうにもなかった。

「だが一応は追うか」

「既に正規軍四個艦隊は動きはじめています」

「今更か？」

それを聞いて思わず苦笑いを浮かべた。

「今まで彼等は何をしていたのだ」

「どうやら敵の後方に回ろうとしていたようです」

別の参謀が述べた。どうやら航宙担当のようである。

「後ろにか」

「敵の動きを分析し、それから動きはじめたので遅れたようです」

「悠長なことだな、全く」

「それで今追撃にかかっていますが」

「ではここは彼等に任せよう」

苦笑いを続けて述べる。

「追いつけるとは思わないがな」

「わかりました。それでは」

「だが。正規軍は何でもマニュアルなのだな」

「全ては的確だそうです」

「的確なのか？」

「はい、システムで戦争しているからだ。この場合でも間違いはないと」

「システムか」

また苦笑いの材料ができた。

「システムで戦争をするというのか」

「そうらしいです」

サハラの者にとってはいささかわからない話ではあった。彼等はサハラの間人であり連合の間人ではないという事実がここでも浮き

出ていた。

「人で戦争をするのではないのだな」

「人が生き残る為のシステムだそうです」

「さらにわからないな」

彼等にとつてはそうであった。

「戦争をシステムでするのか」

「そして勝つのだと」

「確かにそれで損害は極めて軽微だがな」

これは事実であった。

「だが。人をあまり無視するとな」

「連合軍は無視しているとは思えません」

「何も人命だけではないのだ」

司令は言う。

「人で戦う。それを忘れては」

「本末転倒ですか」

「まあいい。彼等とはかく死なないことが目標なのだろう？」

「ええ」

これもまた事実である。連合軍は犠牲を出さないことを重要視している軍隊なのである。かなり政治的な事情があるにしろだ。実はこれは正規軍の将兵にとつては実にいいことなのだ。命を捨てずに済むならそれに越したことはない。その為のシステムでもあるのだ。

「ならそれでいいのか」

「我々を楯にしても」

「何、元々そういう軍隊だ、我々は」

それはもう割り切っていた。

「難民で居候だからな。その程度のこととはしないとな」

「ですね。今後の為にも」

「ではとりあえずはその今後の為に動こう」

彼は命じた。

「追撃だ。いいな」

「了解」

皆それに頷く。義勇軍もまた正規軍に続く形で追撃にかかる。だがその頃にはもうエウロパ軍第一七五艦隊は悠々と戦場を離脱していたのであった。

## 第十三章

「上手くいったな」

クレールはモニターに映る自軍と敵軍のコンピューター映像を眺めながら述べた。

「これでよし」

「既に友軍はトリトンに入っております」

「ではこのまま撤退か」

「はい、そして我々も」

「ここでも参謀達が報告していた。」

「このままトリトンへ入りましょう」

「そしてこのままアルテミスへ」

「そうだな、全ては上手くいった」

ほっと胸を撫で下ろした顔になる。

「正直ここまで上手くいくとは思えなかったがな」

「オレルアンの少女の加護でしょう」

参謀の中の誰かが言った。

「ジャンヌ＝ダルクか」

「はい、今の戦闘でも我が艦隊はそれ程損害を出してはおりませんし」

「これはやはり。彼女の加護かと」

「そしてワルキューレのな」

クレールもジャンヌ＝ダルクのごとは知っている。そしてもう一人の乙女のごとも。

「二人の加護の賜物か」

「我が軍の損害も考えますと」

「損害は一千を下回りました」

「義勇軍に突貫したというのにか」

「はい。これはやはり加護でしょう」

「少女と乙女のな」

「彼女達が奇跡を起こしてくれたのですよ」

「ならば今はそれ感謝させてもらおう」

顔が綻んでいく。

「こうして生きていられたのだからな」

「はい」

「ではこれから我が艦隊は

「トリトンから撤退し、その向こうで友軍と合流する」

クレールは述べた。

「それからアルテミスへ向かうぞ」

「はっ」

「了解です」

スタッフ達もそれに応える。第一七五艦隊はこうして無謀とも思える攻撃を奇跡的な損害で抑えて戦場を離脱することができた。そして事前に撤退させていた友軍の二個艦隊と共にトリトンを離脱するのであった。その中には当然ながらジャンヌ・ダルクの姿もあった。

「まずは一安心ね」

クレспанは自室で乾杯していた。その向かい側にはエリザベトがいる。

「これで私達はアルテミスへ下がる事が出来るわ」

「そうですね」

エリザベトはそれに応える。彼女もクレспанも上機嫌に笑っていた。

「全ては女神の加護かしら」

「パラス・アテネの」

「いえ、違うわね」

だがクレспанは言葉をあらためた。

「これは少女の加護ね」

「オレルアンの少女の」

「そうよ、ジャンヌ＝ダルクが守ってくれたのよ」  
もう酔っているわけでないがこう言った。

「私達を」

「確かにそうかも知れませんか」

エリザベートはそれに応えて頷く。

「この戦いは。常識で考えればとても成功するものではありませんでした」

「ええ」

「大規模な損害を出して撤退するだけだったでしょう。ところが」

「そうはならなかったわね」

「運がよかったと言っべきでしょうか」

「よかったのよ」

クレспанはにこやかに笑って言う。

「オレルアの少女が私達を守ってくれたのだから」

「彼女が」

「そうよ。そして」

今度はエリザベートの顔を見ていた。

「聞いているわよ。敵のタイガーキャット部隊を翻弄したそうね」

「いえ、それは」

「ザーヒダン少佐のものも合わせて十一機。よくやったわね」

「有り難うございます」

顔を少し赤らめさせてこくりと頷く。

「そのおかげで我がジャンヌ＝ダルクのエインヘリヤル隊は助かったわ。そちらはワルキューレの加護ね」

「私はワルキューレでは」

「いえ、貴女はワルキューレよ」

クレспанは謙虚になろうとするのを許さなかった。

「だって。オレルアの少女と共に私達を救ってくれたから」

「はあ」

「これからも。宜しくね」

「その言葉、謹んでお受け致します」

エリザベートは畏まってそう述べた。

「エウロパの為に」

「そう、そして我が軍の為にね。これからも宜しく」

「まだ戦いは続きますが」

エリザベートは述べる。

「戦いましょう、最後の最後まで」

「少女の加護を信じてね」

「はい、オレルアンの少女と共に」

二人は誓い合う。そしてトリトンを去りアルテミスへと向かう。アルテミスの戦いは連合軍とエウロパ軍の激戦の一つとなった。この時も第一七五艦隊は果敢な攻撃を仕掛け武勲を挙げている。その中にはジャンヌ＝ダルク、そしてエインヘリヤルを駆るワルキューレ、エリザベート＝デア＝アルプの姿もあつたという。連合とエウロパのかつてない規模の戦い、苦戦を続けていたエウロパ軍の中の一つの話であつた。

少女の加護 完

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0051b/>

---

少女の加護

2008年11月7日06時31分発行